

身近なアジサイロードはいかが？

今年二月にダイヤモンド・プリンス号が横浜に入港以後、新型コロナウイルスの感染は拡大の一途をたどりまし
た。その結果自粛の嵐となり街での
人影は少なくなりました。遠くへ行
けない、運動不足になる、その解消

清水 正の

一里一尺

～自然をたずねて～ ③

里帰りで人気者に～アジサイの花～

のため

の人が身

近な場所

での散歩

やウォー

キング

グを始め

ようです

私が住む

伏見でも

桃山

御陵に

来られ

る方や

宇治川

の土手

を歩く

人、サ

イクリ

ング

など

が俄に

増え

まし

たか

くは

な

の

散

歩

や

ウ

ォー

キン

グ

を

始

め

た

よ

う

す

。

私

が

住

む

伏

見

でも

桃

山

御

陵

に

来

ら

れ

る

方

や

宇

治

川

の

土

手

を

歩

く

人

、

サ

イク

リ

ン

グ

な

ど

が

俄

に

増

え

ま

し

。

そ

の

中

で

、

特

に

季

節

の

移

ろ

い

を

感

じ

さ

せ

て

く

れ

る

の

が

観

月

橋

か

ら

宇

治

川

派

流

の

伏

見

の

水

運

の

路

で

す

。

あ

わ

せ

て

、

月

桂

冠

の

酒

蔵

や

寺

田

屋

な

ど

の

あ

る

歴

史

街

道

道

も

あ

り

ま

す

。

最

近

再

発

見

を

し

ま

し

た

。

梅

雨

の

日

の

合

間

に

こ

の

路

を

歩

く

と

見

事

な

ま

で

の

ア

ジ

サイ

ロ

ー

ド

は

宇

治

川

派

流

の

散

策

路

③

宇

治

川

派

流

の

十

石

舟

と

ア

ジ

サイ

②

宇

治

川

派

流

の

酒

蔵

と

ア

ジ

サイ

①

宇

は適度な野生の草花が繁茂し楽しみを倍加させてくれます。月桂冠の酒蔵あたりの橋から眺めると色彩の豊かなアジサイが河辺に虹のように広がります。早速、川辺に降りて歩き出すと最も知られた四弁の装飾花（萼片が大きくなった）だけで鞠のようになったアジサイ、装飾花が周囲を額縁のように囲み、その中に本当の花がついているもの、装飾花も一重のものと八重のものがあります。装飾花の柄が長く花火のように見えるものなどのガクアジサイと姿や形も多様です。この形のそれぞれに白、青、紫、赤、そしてその間を繋ぐグラデーションのさまざまな色があるのです。まばゆいまでの艶やかさです。

シーボルトとアジサイ

今でこそアジサイと言えば梅雨の時期の代表としてもはやされてい

ますが、古代から近代までは人気のない花でした。江戸時代にガクアジサイの栽培種がヨーロッパへ渡り、品種改良が盛んに行われ西洋アジサイ（ハイドランジア）として日本に逆輸入されました。これらの多くは手まりの形をした装飾花ばかりのアジサイです。そして戦後大人気を博するまでになりました。原種は日本ですから、日本生まれの西洋育ちと言えます。しかし今では、日本での品種改良が進みまたの園芸品種が生み出されています。皆さんも「墨田の花火」や外国産の「カシワバアジサイ」などではなくご存知だと思います。

在職中、修

学旅行に長崎へ行ったとき、市内にはアジサイホテルな



シーボルト

どのアジサイチェーンが幅をきかせていました。何でこんなにアジサイとつくところが多いのだろうと不思議に思っていました。後でわかったことですが、長崎は幕末にシーボルトが居住した町で、そのシーボルトは草木にも詳しく西洋に一四種のアジサイを紹介したと言われています。と言うわけで長崎にとってはシーボルトを通してアジサイがゆかりの深いものだったのです。シーボルトにまつわる話がもう一つあります。彼が日本に滞在した時、お滝という深く愛した女性がいましたが、彼が



西洋アジサイ（ハイドランジア）

オランダに帰るとその深い思いを自分が好きなたの花のアジサイの学名として「Otakusa」とつけましたが、既に別の学名が登録されていたためこの名は残りませんでした。

自生種のアジサイたち

今までの話は町の中や庭で見られる栽培種としてのアジサイでした。それではその原種となった自生種はどんなものなのでしょうか。アジサイの原種として知られているのはガ



ヤマアジサイ(箱館山)

クアジサ
イ(別名
ハマアジ
サイ)で
房総、伊
豆、三浦
などの半
島、足摺
岬、伊豆
七島など

に分布します。今頃(六月) 私たちの住む京都や滋賀の山では自生のヤマアジサイが美しく咲いていると思います。私のおすすめるは滋賀の酒波林道沿いに咲くヤマアジサイです。白から青、赤までバラエティに富んだヤマアジサイが見られます。特段珍しいわけではないので場所を特定せず、この時期に足を運んでみましょう。それより少し前にはコアジサイが周辺の山々に咲き誇り、芳しい香りを漂わせていました。この間、黒河林道から三国山に登ったときにも甘い香りに酔いしれました。コアジサイは他のアジサイと違って装飾花がない両性花のみで花序が出来ている(わかりやすく言うとガクアジサイの真ん中の花だけ)ので華やかさはありません。しかしそれ故に、この花を好む人もまた多いです。いずれも両性花には雄しべと雌しべをもち、受粉交配をして実をつけます。



コアジサイ(滋賀県安曇川)

この中にはとても小さな種が入っており、散布されたところからは沢山の実生が生育しますが、しっかりと成長して時代を受け継げるのは幸運中の幸運なものだけです。

偉大なり自然の持つ生命力

アジサイの仲間の多くはヤマアジサイのように装飾花を持つもので、タマアジサイ、エゾアジサイ、ツルアジサイ、ノリウツギ、ガクウツギ、コガクウツギなどがあります。これらにつく装飾花は、いずれも虫たちが目立つようにして、多くの昆虫た



ピラミッド型の花序を持つノリウツギ



装飾が裏返し、「本日閉店です」

「生」を押さえつけられても、何とか命を繋ごうと必死の思いで生きている姿を垣間見ることが出来ます。手まり型アジサイの装飾花の真ん中を一つ一つ見ていくと、時々花を咲かせ

ているものがあります。さらに装飾花を分け入って中を覗くと、あるわある花粉を出す雄しべを持った両性花。押さえつけられても負けてはいません。生命力の強さを感じます。アジサイの仲間ではありますが、前述したものは少し違うものとしてイワガラミというものがあります。ツルアジサイと同じくつる性で木に絡みつきながら上へ上へと伸びていくつる性木です。花の色はツルアジサイと同じく白でほとんど同じに見えます。誰もがわかる明確な違いは

ちを集めています。わかりやすく言えばお店の看板です。この看板を見て訪れる虫は両性花で食餌をして、代金の支払い代わりに花粉を運んでくれるのです。そのためか数日して両性花が枯れると、装飾花もくるとひっくり返り虫たちに閉店を知らせます。上手く出来たしくみです。この装飾花の真ん中にボチッと小さな蕾のようなものがありますが、それは退化した花です。手まり型をしたアジサイ（栽培種）は、このような花のない装飾花ばかりですから、

当然、実をつけません。それで増やすためには挿し木という方法を使いますが、

そこには親と同じ花を咲かせても個性ある次代を創り出すことは出来ません。

こんなにしてまで人間によって



木に這い上るイワガラミ



装飾花ばかりのアジサイの間から
除く両性花(生命力の強さ)



エゾアジサイ(札幌藻岩山にて)

アジサイは梅雨の花？

装飾花がツルアジサイの四枚にたいし、一枚だと言う事です。装飾花は長らく残りますので夏や秋に山に入ってもこの二種は見る事ができます。しかし何と言っても梅雨時から夏の初めの純白のイワガラミや、ツルアジサイを是非見て下さい。

関西に住む私たちにとってアジサイは梅雨に咲く花として認識されて

いて、六月のカットは「アジサイに雨傘」や「アジサイにカタツムリ」と言った意匠がほとんどで

す。気象庁発表のアジサイ開花日を見ると、確かに九州、四国、本州(福島以南)はほぼ毎年六月になっています。この花が短歌や俳句、小説などに読み込まれるのは、京都や東京での実体験に基づいたものからでしょう。一昨年の八月、同窓会で札幌に行ったとき、藻岩山に登りました。そこにはからりとした暑さの中で山路に咲く青空のような色彩のアジサイを見つけました。アジサイは盛夏の花でした。地域によって開花の時期は大きく変化をします、同時にもたらずイメージにも大きく変化を受けます。札幌の学級通信には六月号にアジサイのカットは載らないのでしょね。本州でも高度を上げると開花時期は東北や北海道なみとなります。藻岩山で見たアジサイはヤマアジサイにとてもよく似ていました。思わず「まだヤマアジサイが咲いている」と叫んだのですが、

普段からヤマアジサイを見慣れている私にとっては少し違和感を憶えました。よく見ると葉が大きく、幅が広く丸い感じでした。エゾアジサイだったのです。エゾアジサイは北海道、東北、北陸などの多雪地帯に分布しています。日本では多雪地帯の日本海側では太平洋側とは同じものでも少し変異を示すものがあり、一つの種を作っています。葉が大きくなるのは多雪地帯での変異の特徴とも言えます。アジサイは奥深く、まだまだ色んな不思議がありますが今回は取りあえずここまでです。



アジサイ近縁種の分布図
(渡辺一夫氏の著作より)